

闇野の友人、あべこべ世界に飛ばされるってよ

蓮太郎

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

もしも闇野に友人がいて全てを終わらせたのはいいけど自分の知らない世界に飛ばされてしまうお話。

にのまえはじめ様の作品に触発され書きました。一部原作改変と主人公の人外感があります。一部過激な描写（残酷&R―18）をもちこむためそれらが苦手な方は注意してください。

9	8	7	6	5	4	3	2	1
31	28	24	21	18	14	10	6	1

目
次

「ううん……………ここは？」

「時空と時空のはざまだよパワプロ君」

「闇野！それに……………逆巻^{さかまき}まで！どうしてここに？」

「どうしてって君ねえ……………」

ここまでのあらすじ、恵比留高校の暗躍に各校で有名な高校選手たちが次々にスランプを起こし始めた。暗躍に気が付いた円卓高校の野球部は被害にあっていない高校から事情を話し引き抜いた。パワプロと逆巻もその一員であり、数々の困難を乗り越り甲子園決勝で恵比留高校と対峙した。

だが決勝戦が始まる前日、逆巻はある告白をしていた。自分は闇野、『――』の親友だったと。このことを知っていたのはキャプテンの阿麻と黒聖良と途中参入した赤原だけで新たな裏切りかと大いに不信感が持たれてしまう。

しかし逆巻は闇野との関係、闇野が行っている時間逆行の秘密と闇野との衝突で自分も闇野が時間逆行をするたびに同じく時間逆行して様々な学校へ転々と回っていたこと、そして今こそ決着をつける時と先発を赤原と秘密裏に調整していたことを明かした。

彼の確固たる意志と阿麻の後押しによってみんなから改めて受け入れてもらい、彼らは恵比留相手に戦い抜き勝利した。

闇野の悪あがきにも事前に阻止され闇野を捕らえるだけという時に闇野のヘルメットが暴走、御厨をかばったパワプロと逆巻が巻き込まれてしまった。

「ふん、巻き込まれるとは運がなかったな」

「あはは……………」

「しかしどうするんだ？向こうに戻ってから色々やらなきゃいけない

ぞ」

「……………お前は何を言っている？」

「いや、ここから脱出した後の話だけ」

「俺はあれだけのことをしたのに許そうというのか？ 正気か？」

逆巻の発現に闇野は困惑した。自分のしてきた所業は決して許されるものではないのにこの二人は許そうというのか？

「なあ『——』、色々あったけどさ、御厨みたいにやりなおせるさ」

「……………おい、その名は」

「やつぱり忘れてたか。まあ無理もないよね、何千何万も繰り返してたら忘れちゃうよね」

「こいつめ、俺が許されるとでも思ってるのか？」

「勿論だとも、そのために俺はお前と共に繰り返してきた」

そう言つて逆巻は、いや、逆巻とパワプロは闇野に手を伸ばした。

だが彼等には大きな問題を残していた。そう、帰る手段がないのである！

闇野の持つエビルキャップで来たのは良いが、暴走したエビルキャップはこのように時空のはざまにいる限り脱出できるのは一人だけ。そのことをエビルキャップを使用し一番に理解している闇野が語る。

「そんな！ いや、ほかになにか方法があるはずだ」

うんうんと唸るパワプロに苦笑しつつ逆巻と闇野はなんてことないように告げる。

「パワプロ、悪いけど脱出するのは君だ」

「ああ、俺が罪を償うというならお前がここから脱出するのが一番だろう」

「えっ、何を言ってるんだ！ 絶対みんなで……………」

「俺達はズルして強くなつてたからね、これ以上は野暮ってもんでしょ。それに永遠に続く高校三年間も飽きてきたことだし」

「ならー！」

「つべこべ言わずに行つてこいーほら『——』やつちやつて！」

「ああ、分かった」

合図と共に闇野がエビルキャップを発動、パウプロの姿が徐々に光の中へと消えていく。その光景にパウプロは二人との永遠の別れを予感した。

「待ってくれ！闇野！逆巻！」

「向こうに帰ったらみんなにごめんって伝えといてくれる？甲子園優勝の最後までいられなくてってさ」

「逆巻い—————！」

パウプロは最後に、共に戦った仲間と宿敵が昔からいる友人のように並んで見送っている姿を見た。その時に彼は何を思ったのだろうか、逆巻はそんなことを考えて光の中へ消えていったパウプロを見送った。

「よかったのか？お前もアレで帰ることもできたはずだ」

「いやー、だって君昔から寂しがり屋でしょ？こんなところで独りぼっちは寂しいと思うんだ」

「……………そうか、お前はそういう奴だった」

「思い出してくれたか？」

「思い出すも何もお前のような奴を忘れてたまるか」

「……………ふふっ、アツハツハツハ！」

何十年、何百年、何千年の時を重ねようやく二人の時が再び交わった。今は絶望的な状況でも彼らの心には親友と共にあるという心の余裕がある。

脱出もしばらく後でもいいだろうと逆巻は樂觀視していた。

少なくとも、闇野は、『——』はそう思っていなかったことに逆巻が気づくことはなかった。

「逆巻、さっきはエビルキャップの全ての力を解き放ってパウプロを追い出したが、実はまだエネルギー源がある」

「マジで？じゃあ何とかなるじゃ……………待って、魂をエネルギーとするソレにエネルギー源？君、まさか」

「さすがは親友といったところだ。そのまさかだ」

もはや用済みとなったと思っていたエビルキャップが、ソレを抱え

ていた闇野と共に輝き始める。

魂は今ここにあるのだ。それも数多の魂を啜ったエビルキャップ好みの邪悪で肥大化した魂がここに一つるのに気づいていなかったのは逆巻のみだった。

「ここまで堕ちた俺を倒すのではなく救いにきたという馬鹿はそうさういない」

「やめろ！そんな事したら君が消えてしまう！」

「……………もういいんだ。お前が生きていてくれたら、それだけで俺が生きた証を残せるのなら喜んで魂を投げだそう」

「よせっ！——————！」

いくら手を伸ばそうとその先にいるのは満足そうに微笑む『——』のみ。その笑顔を見て彼が何を思ったのかを悟り、光の中に飲み込まれていく。

気が付くとそこはいつもの自室のベッドにいた。時計を見ると甲子園から三年前の年で日付は甲子園決勝の日。いつものように最後の時間逆行をはたしたのだ。

「あの……………馬鹿野郎め」

すべてが終わったことを受け入れるのにベッドで数十分はかかり動けなかった。

しかし、持ち直しがいいのは彼の長所である。伊達に時間逆行の回数をこなしていないのだ。時間逆行がいつもと微妙に違うせいに戻る時間も微妙に違っており、丁度甲子園の中継がしている時間だった。

だからだろう、無意識に甲子園をテレビ中継で見ようとしたのは球児として当然だった。

しかし、そこに映っていたのは

「……………あつれ？」

女性ばかりの甲子園で

「……………あつれ？」

周りにちようどあった雑誌を見ても女性ばかりで

「え、ちよ、もしかして」

割と気について定期的に買っていた漫画の主人公も女性になつていて

「世界………間違えた？」

時間逆行し終えた超人球児、男女比を間違えているのではないかと
いう世界に来てしまう。

私立みたま高校、かつて甲子園大会の通算成績において夏二回、冬三回の優勝を果たした強豪校である。

しかし最近ではあかつき大付属高校や帝王実業高校に押され気味で前回は準決勝で敗退。その時のリベンジを果たすべく現在は熱心に練習に取り組んでいる。噂ではいい新入生がいるという話だ、かなり期待が高まっている。

そんなにモチベーションが高まっている彼女達を眺めているのが我らが逆巻である。

端的に言うと、彼は何百回も時間逆行をしているため野球のスキル、いわば特能を極め切っている野球少年である。ただし、それは前までの世界ではの話である。

正直に言って大量の特能を持っていたとしても前の世界では普通に打たれたりあつさり三振にされたりする猛者が大量にいた。猪狩守とかマキシムとか阿麻とか虹谷とか木場とか不屈とかケンシロウとか、あれ、自分でもかなり鍛えたと思ってるのに結構多くね？

とまあ、激闘を続けてきた彼にとって今の身の振り方はかなり悩ましいことになっている。このまま野球を続けるか、それとも別の道を歩むか。

この世界には『——』はおろかどの高校に行っても絶対にいたパウプロと矢部昭雄の姿もおらず、知っている面々も何故か女性になっており話しかけることもはばかられている。ただのヘタレともいえるが責めないでやってほしい、彼女キャラは全部パウプロに取られてたし恋路を応援するタイプだったのだから。

そんな田中山太郎似でモテない彼もここでは別、調べたところ男女比がいように女性に偏っているかつ性欲も彼の知ってる男子高校生と変わらない。逆に男子高校生の方は大人しくまさに草食系といって差し支えない。

故に、迷った。

なんかかんやで野球はプロよりできると自負している自分が逆に

チームの輪を乱しかねないのではと考えるほどになっていた。

「あの、野球部に何か用があるの?」

「あー、入部しようか迷っていて」

「えっと、入部? マネージャーじゃなくて?」

「はい、具体的に言うところとあそことあそこを守りたいんです」

逆巻が指さしたのは外野とピッチャー。外野はともかくピッチャーをやりたい男子はいない、というか野球部に男子の選手は全く持って見受けられない。つまり、今の逆巻は前の世界の目の前にいる彼女と同じ存在なのだ。

「早川さんだっけ? あのスライダーで有名な……………どこのチームか思い出せないけど」

「なんか失礼な気がするなあ。でも男子がピッチャーを務めるのは無理だと思うよ。だって私がいるもの」

「テストヨネー」

まさか彼女がここにいるとは思っていなかった、とは口が裂けても言えない。こういうことはまれにある、他校の選手が本来いる高校にいたりいなかったりすることが。

そんな会話をしつつ練習に励む野球部を再び見る。余談ではあるが、逆巻が見ていることで気合が入っていた利入っていなかったり。

「まあでも、試験さえ突破できたら大丈夫だともうよ」

「……………そうですか」

逆巻はその会話を終わりにするかのようにその場を去った。一方的に切る形だが、両者にとってはどうでもよかった。片方はこの世界にはいない友人のことを思い、片方は男子と話せたことでガッツポーズをとって内心狂喜乱舞しているため問題はないのだ。ないっただけだ。

翌日、野球部に入部届を持ってきた逆巻がいた。もちろん、マネージャーではなく選手としての入部である。

ちやうど新入部員の入部テストを行う土壇場ではあったが、ジャージやグローブ等の必要物品は既に準備していたため飛び入りで参加することができた。

「新入生の逆巻時碇ときさだです。ポジションは外野と………一応ピッチャーもできます。ギリギリでの入部届だったので今日が初顔合わせになります。よろしくお願いします」

地味とはいえ男子は男子、女子部員しかいないこのご時世に華が来てくれたことにおおと感嘆が上がった。しかし、内心ではどこまでやれるか見もの程度と思っていた。

先ほども言った通り今の彼は彼の知る早川あおい状態、無謀ともいえる挑戦を行おうとしている同じなのだ。

注目を浴びつつ先輩からの説明が入る。内容は短距離走、長距離走、バッティング、遠投、そして新入生同士の練習試合である。

ここで現在の逆巻時碇のステータスを確認してもらおう。

投手能力

最大球速135 km

コントロール102

スタミナ60

適正・中継ぎ

特殊能力（虹のみ表示） 真・強心臓、真・怪物球威、真・変幻自在
金特殊能力以下全て取得済み。重ねられない能力は適時切り替え可能（例・ポーカーフェイスと闘志）

変化球 カットボール6

ドロップカーブ6

????
（オリジナル）7

シンカー6

野手能力

弾道2

ミート102

筋力60

走力60

肩力80

守備力102

捕球102

適正・外野

特殊能力（虹のみ表示） 真・安打製造機、真・広角砲

捕手及びそれぞれのポジション専用の特能以外の金特以下保持

控えめに言って怪物である。少なくとも技術面は一年生の能力ではない。ここからまだ成長できるというが、時間逆行を繰り返しているためどこまで筋方面を伸ばせるかが常に課題と彼は言う。それでも肩力はS1に行かせるため伸び幅はかなり高いのだろう。

闇野がステータスを蓄え身体面を超人化するタイプというなら逆巻は力は蓄えられない代わりに技術を持ち込めるタイプだったのだ。

つまりは、持久走と短距離走以外の項目では非常に優秀な数字をたたき出した。もちろん、この結果を出したことで彼を見る目が大きく変わったのは言うまでもない。

そして時間はあつという間に過ぎて練習試合をする時間になった。

外野と投手ができるという逆巻の扱いにチームメイトは困っていた。外野ができるというならそこに置いとくだけでフィールドに男子がいるという事で士気が上がり、ピッチャーなら意外性で押し切れるかもしれないと考えていた。

しかし、この世界の常識は男子は貴重品なのだ。ピッチャー返して怪我でもされたら後から何を言われるか気になるし嫌われては心が撃沈してしまう可能性もある。故にピッチャーから外され外野で落ち着くのが道理であった。本人からの不満がなかったことがもめなかった一番の幸運だろう。

逆巻のチームは後攻なのでプレイボールの合図と共に逆巻はレフトへと向かう。ピッチャーは山口賢、名前はともかく女子である。

非常に異常と思われるが、彼の知る男性選手が軒並み女性になっている上に名前だけは男と変わっていないという混乱させそうなことになっていた。が、男の名前を女兒につけることは多いらしく余計に混乱してしまったのは言うまでもない。

「よし、外野まで飛ばさせないようにしよう！」

オー、と小鷹美麗の掛け声に合わせてチームメイトが意気込む。もちろん外野にいる逆巻も声を上げたが苦笑い気味だった。なにせこの世界の男子の身体能力は女子よりも何故か劣っており逆巻がいるレフトに打ち込まれ続けると体力が尽きて守備が甘くなるかもしれないからと考えられているからだ。

そのことを見越してか三塁側の守備が無意識のうちか固められている。過保護か。

試合が開始して山口のピッチングが始まる。得意のマサカリ投法で120km台のピッチングを見せ、キレのあるフォークで三振を取っていく。右投げをしている彼女を見て安心したのは彼だけで、心配になったのも彼だけだった。

ツアアウトとなった時に出てきたのが友沢亮、激闘第一高校の面子がこの学校にいたので少し驚く。本当に少しだけ、というのも世界線

によつてはあかつきにいたメンバーがパワフル高校にいたこともあつたし、闇野が恵比留におらずアンドロメダ高校にいたこともあつた。誰がどこにしようとあまり不思議ではないのである。

友沢という巧打者は山口のボールを上手くさばきライト方向へ打ち込みヒット、それに続きたい相手チームであつたが次の打者で凡退してしまい攻守交代となつた。

裏の攻撃、一番バッターは逆巻だつた。

「よし、打つていくよー」

若干気の抜けた声だが緊張気味のチームメイトがクスツと笑う程度にはほぐすことはできただろう。ムードの作り方は経験から学んだ彼にとつて簡単なことだつた。

対して相手ピッチャーは早川あおい、いきなり名投手を先発として起用されていた。流星に彼女相手にヒットは難しいだろう、そう考えられていた。

カツキーン！

だが違つた。

「フェンス直撃……………」

誰かが呟いた。ホームランには至らなかつたがあおいの初球のマリンボールを強打で外野者を軽く超えてフェンスに当てた現実に打つた本人以外理解が追いついていなかった。

あおいも少しビビらせてやろうとインコースに得意なマリンボールを投げ込んだつもりだつた。それがどうだ、あっさり飛ばされたではないか。

(完全に読まれてた……………！)

初めて見る男子選手だつたことからキャッチャーの小鷹もあおいが投手ならその手に乗つていただろうと考え、それを読んでいた逆巻に戦慄を覚えた。

マリンボールは決め球として直接見る機会もないし、逆巻という無名が見る機会なんてない球を1発で飛ばす。これがどういふことか分からない者は少くない。

意外なヒットだつたせいかつツーベースまで行き、次の打席に名も知

らない選手がバッターボックスに立ったところで彼はさらに予想外な行動を取る。

「っ?! サード!」

キャッチャーがあおいの初球を取った瞬間、すぐさまサードに投げ込む。

「どりやああっ!」

「……………せ、セーフ!」

「よっし!」

誰が予想できたか、二塁から三塁への盗塁である。決して足は早すぎるといえないが最高のタイミングでの走りに加えて気迫あるヘツドスライディングに気圧されてタッチが遅れたため盗塁は成功、しかし歓声は上がりずシーンとした空気が当たりを包む。

動きが明らかに素人のソレではない。自身という意外性も利用した大立ち回りしている。というか練習試合に本気を出しすぎである。ユニフォームまだ配られてないからジャージだぞ今着てるの。

「なんスかあの人!?!いくらなんでも大胆すぎやしません!?!なんで今まで表に出てなかつたんすか!?!」

彼と同じチームである川星ほむらが叫ぶ。それは監督含め全員意見が一致していた。

脚力以外は一級品、その上技術もプロ顔負けで基本は外野だが投手まで本人は出来ると言っている。あながち嘘ではなさそうだし投手としてグラウンドに立つとどうなるのか。

その後はヒットを打たれ逆巻はホームインして一点がはいる。チームメイトにハイタッチしようとしてた逆巻だが反応が無かったので肩を落とした。

考えて欲しいのだが、男女比が変わってる世界でいつも通り振る舞ってる逆巻がおかしいだけで彼女達からしたらセクハラに繋がりがねないのだ。主に、逆巻への加害者として。

そんな気も知らずに試合は進んでいく。そして打順が一巡して再び逆巻に回ってきた。ピッチャーはあおいではなく別の人物になっていた。

カツキーン！

「よっし、フェンス越えた」

まるでバッティングセンターでホームランを打ったかのような台詞と共に彼は本日二度目のホームベースを踏むのだった。

練習試合の5回裏が終わり5―4、新入部員の能力を見るためとあつて入れ替わりが激しく打ち込まれることもあつたりして逆巻のいるチームは押され気味になつていた。

練習試合ということあり6回で終わりとなるため最終回の6回表となり再びピッチャーが交代の指示が監督から出る。

全てのピッチャーを出し切つたと思つていたが、外野にいたあの男がまだピッチャーとして投げていないと言われて一同納得した。覚えていられるだろうか、一応ピッチャーが出来ると言つたのは彼自身だ。バッティングが神がかつていたせいで忘れかけられていたが、小鷹はすぐさま投げられる球種を聞く。キャッチャー故にピッチャーを理解していなければいけないためだ。

そしたらなんと四方向、フオークは何故か封印していると本人が言つたため全員「？」となつたが頑なに投げないと言うことで仕方なしに三方向のサインだけは確認した。

そして、遂に彼がマウンドに立つ。

「見て！外野守つたあの子がピッチャーのどこ来たよ！」

「うそ、みんな凄かつたけど投げられるの？」

「ちよつと地味かなあ？にこやかだけど案外凛々しいかな」

野次がうるさいが彼は気にしない。むしろ観客に手を振つてアピールするくらい余裕を見せている。そのせいでキャーキャーと黄色い声援が多くなつたので本当に余計なことをしてくれる。

バッターボックスに立っているのは冴木創、前の世界では女性ながら優秀な野手でこちらでは姿かたちも一切変わっていない。あの頃は王子様のコスプレしてすぐくキャーキャー言われていたのを思い出し、侮つてはいけないという事もしつかりと覚えている。

だからこそ気を引き締めて挑まなければならない。チャレンジャー逆巻が第一球目を投げる！

「ストライク！」

「っ！速い！」

外角高めストレートの見逃しによりワンストライク。この時点で130kmは出ていたがスピードガンを使用していないため詳細は分からない。それでも冴木が体感した中で一番の速度だったことは間違いない。

このストレートによって場がまた静まり返る。受け取った小鷹は思ったよりも重かったストレートを受け止めた手がいたいと思いつつナイスボールと投げ返す。

その後、あの冴木に遊び玉なしで変化球を交えてファールを取りつつ三振させた。

「……………どうでしたか冴木さん？」

「……………すまない、あれほどの球を投げられたのは初めてだった。変化球のキレも恐ろしいがあのとストレートは化物としか言いようがない」

体感したらわかるとだけ言って冴木はベンチに座り込む。心の底では男子が投げるボールだと甘く見ていたのだろう、実際他のメンバーもそう思っていた。

（お遊びで入ってきたと持っていました、これは相当まずいかもしれませんね）

蛇島は考える、目の前の男の才能は計り知れなく今の自分が勝てるかどうか、それ以前にバットに当てることができるのかという不安が募っていく。

打席に立ち様子見と一球目をみたが、彼女は瞬時に悟った。このストレートのノビは異常であり、手元から手前の体感速度も並大抵のものではない。冴木だって苦しむはずだ、こんなものまともに打てるわけがない。

変化球も自分の頭が狂ったのかと錯覚するくらいのキレと早さだった。気づけばバットが空を切り三振となっていました。相手が男だから緊張した？男だから手加減してしまった？そんなもの言い訳に過ぎない、悔しそうに顔をゆがめながら彼女はバッターボックスを下りた。

「私が言っていた意味が分かっただろうか？」

「……………ええ、とても堪能させていただきました」

続いているバッターはか投じてボールをバットに当てさせられ凡退となつてしまい攻守が交代した。

ピッチャー鶴屋勝に対して先頭バッター逆巻時碇、初球でホームランを打たれはしなかったもののツーベースを打たれたのちに四球を連発してしまい満塁に、そして友沢のサヨナラヒットにより逆巻がいるチームが勝利したのだった。

「あの、大丈夫ですか？」

「え、何……………が？」

「いやだって、ジャージが泥まみれで……………」

「い、いや、いいの、これくらい気にしないから」

大問題だろう、と声をかけたマネージャーは思う。ただでさえ希少価値が高いし地味ではあるが顔も整っているので泥だらけというのはいけない。しかし、着替える場所も男子選手がはいつてくることを想定していないため着替える場所もない。

そもそも練習なのに気合の入り過ぎたプレーを見せるのがいけないのだ。最初の盗塁もそうだが外野での守備もワンバウンドでとればいいものをスライディングしながら掴みに行ったりする場面もあり怪我しないかという悲鳴があがっていたりする。

「あとで洗うから平気だよ。明日が楽しみだよ」

さすががしいまでの棒読みでさっさと走って行ってしまった。マネージャーはきよとんととしていたが、もしかしたらかなり緊張していたのかもしれないという考えにいたりクスリと笑った。案外シャイなところがあるんだと自己完結した。

一方、逆巻は思いもよらぬ再会、というよりそっくりさんに出会ったと信じたいと汚れたまま荷物を持ち寮へと帰っていった。汚れた

姿に偶然鉢合わせた寮長は何かあったかと聞かれたくらい表情が硬くなっていたらしい。

何もないと答えてもしつこく聞こうとしてきたため強く否定してさっさと自室へと戻っていく。その際に泥だらけのジャージを脱いでいく。風呂は男子寮の部屋に一つずつあり、また男子を守るためとセキュリティも非常に強固にしておりプライベートに干渉できない仕組みとなっている。

だが、逆巻が部屋に入る前に脱ぎ始めたのは不用意だったと言わざるを得ない。これが後で出回るなんてこの時は思いもしなかったのだから。

それはそうと彼が何故あの時でもったのか、言葉に詰まったのは予想外な再会であったからだ。

「御厨………お前、男になってたのか」

この世界は男性が女性になっており、女性は女性のままという認識だったがそれも甘かったらしい。

放浪の魔女、御厨真歩のように元の世界でマネージャーをやっていた女性が男性になっているなんてよく考えもしなかった。

御厨真歩と出会った！

「ふむ、今年の新入生は豊作ですね」

「はい、早川さんをスカウトできたのは大きいです。他にも友沢さん、鶴屋さん、川屋さん、蛇島さん、冴木さん、小鷹さん………これからまだまだ伸びる人も含め素質が高い人が多いです。ですが………」

「やはり、彼のことですか」

「男性とはいえ何故無名だったのか、これから荒れそうですね」

ここで話し合っているのは監督と野球部キャプテンの新島早紀である。副キャプテンである青葉春人は練習中の2、3年生がサボってないか目を光らせているためここにはいない。

テストの結果から新入部員を厳選したが、今年は豊作なのは間違いない。優秀な選手がそろって私立みたま高校へ入学してくれたのだ、今年から来年の甲子園優勝の望みはかなり高いと言える。有名無名問わず実力があれば活躍し仲間と切磋琢磨してさらなる成長を続けてくれたらなお良し。

でも今年はそう易々と言えないことになってしまった。逆巻時碇のせいである。今、彼は目の前で新入生たちと同じ基礎体力をつけるための練習メニューをこなしている。年齢からなる筋力や体力的にも厳しいものであると新入生だった頃を思い出す新島。なお、今やっている練習メニューは彼女が考えたもので当時と比べてはるかに厳しいものだが。

それでも汗水たらして食らいついていけるあたり元のスペックは高いのだろう。鋭いコースに的確に投げ込められるため投手として使いたいところだが外野手としての能力も高いため扱いが難しい。それだけでよかつたらいいのと思えば新島はある写真を取り出す。

今朝、新聞部から出回りそうになった写真だ。それも逆巻が自室玄関の前でジャージを脱いでいる場面である。セキュリティは強固であるが万全ではない。窓から見えるところもあり、偶然張り込んでいた新聞部がシャッターを切ることに成功したのだ。この後に偶然新入

部員の記事について打ち合わせのため新聞部を尋ねていた新島が居たため帰ってきたカメラマンが勢いよく報告したことで発覚、没収となったのだ。

映っている二の腕をみて「ほう………」と息を漏らした新島だが監督がこちらを向いていたため咳払いをしてごまかし写真をしまおう。こんなもの漏らしてはいけない、彼女はそう思い大切そうにしまった方のポケットをさする。

「こうして写真の流出を止めることはできましたが、噂は止められませんがねえ」

「はい、アレを見たらいやでも分かりますよ」

本来、男子というのは運動部ではなく文化部に入るのが当然と言われているが極まれに運動部の選手としていたりする。しかし、たいていは女子との体力や筋力の差が大きくついてしまいマネージャーに転向してしまう。

だが、今回の注目の的となる逆巻は別である。強豪校故の厳しい練習にも現在はいついてきており練習試合を見ていた者は認めざるを得ない技量を持っていることから、彼がどこまでやれるかと聞かれたらどこまでもいけるんじゃないかと答えるしかない。

それが噂となり大量の野次馬が押し寄せてきてちよつとした迷惑になっっているのだ。

他校の偵察から彼の存在は隠さなければならない。幸いにも私立みたま高校には室内練習もできる施設が整っているためその問題は解決できるだろう。ただし、野次馬がが押しかけてくる場合は別だが。

「監督、彼は一体どういう環境で育ったのでしょうか。危機感がまるでない」

「そうですねえ、よほど甘やかされてきたか女性がない環境で育ったか。後者だと実力があるのに無名だった理由が納得できますが、そうなるかどうかでなのかが気になりますねえ」

「ますます謎が深まっていく………」

現状では手が余る人間だ。ひとまず様子見して野手か投手のどち

らかに専念させる方が吉とだろう。

「早川さん、その投げるフォームにブレがあるよ。ここを」

「ひゃあ!? さ、逆巻君!」

「逆巻君が指導してる………うらやましけしからん」

(守備投球だけでなく指導までできるのですか、もはや彼がレギュラーになるのは確実だろう。ちっ、お高く留まりやがって)

「ちよ、こらー! 突然の接触禁止! 投球練習が終わってから………
というかまだ私達の調整なんだけど!」

コツイベントが発生したのに周りが連鎖的に反応していきなり大混乱。初日とはいえお互いのことをよく知らない(逆巻除く)のに距離感が異様に近い。ものすごい風紀の乱れに新島の表情が無くなる。彼がやっていることは善意なのだろう、実際に的を得たことを言っているのでそこは良いのだ。だが、周りがいちいち反応していたらちが明かないし、青葉もすっかりあの輪の中に交じっていることも許せないのだ。

だから爆発するの無理はないのだ。

「こらあ! そこ! サボってないで練習しろお! へんなもの見せつけるんじゃないっ!」

『は、はい!』

部長の一喝により再び風紀は正されたが監督共々ため息をつく。恐らくこんなやり取りがしばらく続くだろう。それも逆巻が態度を改めない限り、混乱は避けられない。

「これからが大変ですね、特に彼の教育が」

「それまでに襲われてなければいいんですがね」

野球部の前途は多難である。だが彼が及ぼす影響が良くも悪くも転がるため手を出せずにいるのだった。

残念なことに、当の本人は技術や技能だけは無駄にあるためコツを教えたが叱シバられた副キャプテンの青葉が目を光らせていたためそわそわしつつ練習するのであった。

ここ最近、私立みたま高校は騒がしい。話題はある運動部にむけてのものばかりで、さらに特定の人物についての話し合いが女子達、さらには男子達も繰り広げられている。

もちろん、逆巻のことである。いろいろと想定外だったこともあり噂は千里を駆ける如く広まっていった。物珍しさに見物に来る者が絶えず、視線が増えることで常に見られてしまうことから練習にも支障が出始めてくる。

流石にまずいと考えた野球部らは仕方なく室内練習を多く取り入れ逆巻の姿を外に見せないようにした。

不満が多く出るだろうが、これでもかなり妥協した方である。逆巻がチームメイトと練習したいしコツを教えたいのに対してチームメイトもいきなり声をかけられて手とり足とり何かされそうになるので理性が抑えられなくなると泣きが入ったため渋々受け入れた。

とりあえず練習メニューを考えるから自由に施設を使ってくれと行って新島が言い、完成したことでメニュー表を渡しに小鷹と青葉がは派遣されたのだ。

「青葉先輩、逆巻くんのことどう思いますか？」

「顔は地味かもしれねえが悪くないと思うぞ」

「そうじゃなくて野球のことです」

「んんっ！そ、そっちな。悪くはない、というか一年生用とはいえ早紀のトレーニングについてこられてたし守備の方は下手すりや三年生よりもうまいかもしれん。投球は私の方が上だがな」

負けず嫌いな彼女としては投手としての能力は絶対の自信を持っていた。日に日に改造している魔球もよい感じに仕上がっておりやすやすとマウンドを明け渡すつもりはなかった。

まあ当然だろうと小鷹も思いつつトレーニングルームに入る。トレーニングルームにはダンベルやルームランナーなど個人で自分の身体を鍛える道具がある。室内練習だと逆巻はここに籠ってしまい今のところ姿が見えないのだ。

「……………はっ……………はっ！」

ルームランナーからすごい音をだしつつ、そこで汗だく&タンクトップで走り続ける逆巻の姿があった。

肉体は完全に鍛え上げたとは言い難いがしつかりと締まっており、首筋を流れる汗が蛍光灯の光を反射してさらなる扇情感を引き立てる。視覚の暴力だけならよかったが全力で走り続けているため息切れしている声が余計に彼女たちの欲を掻き立てる。

流石に理性がヤバいと感じた小鷹は目を逸らす。その視線の先にいた青葉は目を閉じ不動の状態だった。

(青葉先輩が耐えてる！いい、いや失神してるう!?)

あまりの出来事が不意打ちで起こったため青葉の脳はパンクしてしまい最大の防御反応として立ったまま意識を閉ざってしまった。しつかりと鼻血を出していることから漫画のように下心が丸見えであった。無理矢理後ろを振り向かせて起こそうとするも現実に戻ってくる気配がない。

「先輩！ちよつと戻ってきて！こんなところで私を一人にしないで！」

非常に思いやりと悲しみある叫びだが状況が状況だけに何とも言い難い虚しさが込められている。

「ふうう、あれ小鷹さんと青葉副キャプテン？」

「アツ！チョツ！いまこっちに来ないで！ヤバいから服も着て！」

「汗だけでもまだやることあるし……………」

「いいから行けー！」

「アツ、ハイ」

鬼気迫る圧を感じて今までの経験上、長居するとろくなことがないことを知っていた逆巻はさっさとシャワー室へ逃げ込む。残っていたらなにかしらの悪いイベントが起きてしまう気がしてならず、早い段階でやる気が減ったりするのは勘弁してほしいのだ。

さっさとシャワーを浴びて着替えた逆巻を待っていたのは鼻にティッシュを詰めた青葉と何だか疲れた様子の小鷹だった。

「あの一、なんでそんなに機嫌が悪いの、ですかね？」

「あのさあ……………自分が何したか分かってる？」

「え？えーと、時速20kmで20分走り続けてただけだけど……………」

「本当に何してんの!？」

「アスリートでも15km程度のはずだが、待てよ？もしかしてお前持久走やってたのか？」

「はい、あと10分走る予定でしたが」

ルームランナーの音がうるさい理由は分かったが、自己鍛錬の内容もかなりおかしいし本人はまだ余裕がりそうに振る舞っている。あれだけの速度を走り続けて筋肉の痙攣もないとはどういう身体をしているんだ。まだスタミナはCランクなのだが一人でスペシャルタッグ状態を引き起こそうとしているのか。

どういう理由があるろうとひとつ間違えたら怪我をしてしまう可能性が高い練習だ。

「……………ほかに何かやろうとしてたか？」

「あのベンチプレス(50kg)をやろうと」

「お前もうこトレーニングルームこで自己鍛錬するの禁止な」

「何故です!？」

本気で理解できていない彼の顔にペしんと新島考案のトレーニンググレシピをたたきつける。一見非難されそうな行為だが逆巻がやっていたことを聞くと微妙に責めにくくなる。

なお、このことを知った新島だけでなく友沢や山口ら部員に滅茶苦茶叱られた。前の世界で怪我した組にはお前が言うなど言いたいのころだが、この世界の蛇島はまだおとなしいし、まだ危機的状态にはなっていないため文句は言わなかった。

いや、そもそも自業自得だということを忘れている。

流石に入部して一か月もたっていない状況でレベル5の特訓はまじかかった。今度からはレベル4程度に抑えようと逆巻は決心した。

もちろん、後日こっそり厳しい自己鍛錬をやっていたことがバレて監督からも叱られました。

練習レベルが3低下した！

「……………あの、すみません練習は？」

「貴方の練習はここでじっとしておくことです」

「いや、それ練習じゃなくて」

「貴方の練習はここでじっとしておくことです」

「その……………」

「いいです ね？」

「……………ハイ」

みんなが練習している中、たった一人だけ監督の横で座っている野球部員がいる。言わずもがな逆巻である。

なぜこんなに監督から目を付けられているかというと、この男は基本的にオーバークワックしかないのである。一応、体力の調節は上手く行えているようだが体を壊すような練習を続けていたら元も子もない。

逆巻からしたらスタミナと筋力をできるだけ上げたいのだが、どうしても練習量が足りないという。いくら何でも贅沢過ぎる発言だ。

限界を超えそうなオーバークワックを重ね続けるため無理矢理休みの時間を与えたのだ。

「練習馬鹿って言葉が似合うよね。いきなり何やってるんだか」

「確かにな。だがよく見ろ、手にハンドグリップを握ってるぞ」

「私達もあれくらいやるべきなのだろうか？」

「すつごい筋肉痛になるからやめといたほうがいいよ。というか動けなくなっちゃった」

「あおい、まさかこの前休んだ理由って……………」

女三人寄れば姦しいというが、この世界では当たり前である。むしろ男を襲う前触れから『姦』という言葉が作られたという話があるくらいなのだ。では嬲るといふ字は？どう見ても逆ハーレムです。

それはそうと今日の練習はみな一層励んでいる。なぜなら練習試合が決まりメンバーに選ばれようと必死なのだ。

練習試合の相手は天空中央高校。甲子園に出場経験は少ないが地

区予選決勝には必ずと言っていいほどの出場率を誇り、なぜ甲子園に出られないんだと言われるほどの実力を持った選手がそろっている。油断すればあっという間にやられてしまう相手と分かっている以上、ぬるい練習をしていたらメンバーになれるかどうか危ういのだ。

「しかし、対戦相手は天空中央高校かあ」

「友人でもいるのですか？」

「いえ、でも天空中央高校と言ったらあれでしょう？あの男たらしで有名な……………」

「ああ、なるほど」

世間知らずと思っていた少年も多少は物を知っていたようで安心した監督。逆巻もやはり今の虹谷誠がどうなっているか心配だった。(虹谷誠は女好きだったけど、ここじゃ男好きになってるって話だからな。こっちのマネージャーにも手を出しかねないな。本当に自分の欲で動くもんね。下手な事したらマネージャーを取られかねないな)

かつてのループで天空中央高校に所属していたことがあるからこの危惧である。あの時はさらっと自分もエンジェル探しに参加したが、すごいことやっていたんだなと彼は思う。無いとは言いたい、こちらには御厨真歩(男)がいるため引き抜かれたら困る。

既に本人とある程度の話はしていた。性格は猫被っている時の御厨と同じであざとく(男であざといのはどうかと思ったりしたが)今のところ何か企んでいたりはしないとと思う。今のところはだが。

流石に魔法使いであることについての尻尾は出してくれなかった。なんやかんやで話術はかなり巧みでごまかすことに関しては変わらずだった。

「監督、練習がしたいです」

「ダメです、今日は休みなさいと何回言えばわかるんですか？」

「いやでも……………」

「貴方はなぜそんなに焦っているのですか」

監督にその言葉を言われた瞬間、彼は口を閉ざしてしまふ。彼のように上限を超えた練習して早く力を付けようとする選手はたまにい

るのだ。いくら不興を買おうとも壊れてしまうことを防ぐのも監督の役目である。

「……………ダメなんですよ、今のままじゃ」

「ダメとは？既に守備や投球は基準値以上の成果を上げているのに足りない！？それはあまりにも贅沢と思いませんか……………」

「これじゃあ追いつけないんです！」

いつもへらへらしている逆巻が怒鳴った。普段彼を見ているなら驚いてしまうだろうが監督はポーカーフェイスのまま、自分を追い込み過ぎている選手を説教をしている最中に逆切れされることはよくあるため動揺はない。しかし、内心は……………

（この気迫……………やはり何かおかしいと思いました、何か抱え込んでいますね）

高校一年生に出せる感情の爆発ではない。心が弱ければしりもちをついて震えてしまうくらいの気迫を逆巻は放っていた。それもすぐに収まり静かになる。彼の顔に笑顔はない。

「泣いても笑ってもこれが最後なんだ。妥協も諦めることもできないんだ。……………と……………」

誰かの名前を呟いたように見えたが聞き取ることはできなかった。逆巻の憧れの人物なのか、それともコンプレックスを抱いているのかまでは分からない。

「すみません、言っても意味ないですよね」

先ほどの気迫と真剣な表情はどこに行ったのやら、またへらへらした顔に戻りハンドグリップを握りだす。

（これは思ったよりも重症かもしれませんね）

想像以上に追い詰められている。何を追い詰められているのか、そもそも追おうとしているのかすら恐らく彼は語ってくれないだろう。

ならば監督として行うことはただ一つ。

「逆巻君、貴方には頼れる仲間達がいいます。貴方がどう思おうとも頼るときは頼りなさい」

彼が壊れないように助言するのだった。

なお、その頼れる仲間達はずっと逆巻のそばにいる監督に嫉妬の目

を向けていた。なんともオチのつかない話である。

天空中央高校野球部、実力はあるものの高頻度で甲子園に出場できないという事が多い高校と言われているが、いざ甲子園に行くと言つていいほど決勝に現れるという悔ることが一切できない高校だ。

侮られていないからこそ甲子園に出場できない非は彼女らにないのであるという声も上がる。割とそう思われている。

しかし『それはそれ、これはこれ』という言葉があるように対策されたから負けたという言い訳は通用しない。対策された上で超えてこそ勝たなければならぬのだ。

それだけならよかつたのだが……………

「さあ、見ていてくれ天使たち！僕たちの華麗なる勝利を！」

『『頑張れマコトさん！』』

女性がなかなかモテない世界でモテると言う光景を見せつけられて相手にイラつきと嫉妬で潰してやろうという気持ちを沸かせるという行為で余計に強敵を作っていた。

虹谷誠を筆頭にモテる女子らが絶対数の少ない男子を侍らせ現れるのを誰が白い目で見るといふのか。

いや、一人だけいた。

「やっぱりあなのか……………」

「……………逆巻くんはあんなのに引つかかっちゃだめだよ」

「割と本当に近寄りたくない」

逆巻が今まで見てきた虹谷誠と変わらぬモノが目の前にいるのに対してどこか懐かしさを感じている。その生態には一切触れていないが、懐かしそうな眼をしている。

今回みたま高校と天空中央高校は練習試合という事で集まったり、強豪同士の戦いとして注目を集めている。

ただ強豪の戦いだけではない、一年生のデビューとして最も注目高い試合を期待されているのだ。

最も、中学生から有名になっている少女達を見にいているのであつ

て噂程度でしかない上にベンチで座っている逆巻のことなどただの盛り上げ役としか思われていない。

事実、彼がいるベンチは情けない姿を見せまいとエリートとしてのプライドとあわよくばアピールしようとする下心が見えていた。

残念ながら恋色沙汰は逆巻には関係ない、そういうのはパワプロの仕事だ。天空中央高校での出来事？そんなのはない、六股とか言う訳分からないことをしでかしたやつが歴史なんてないつたらないのだ！

「逆巻さん！壁に頭を打ち付けないでください！価値が！」

「いや、こんなのに価値はないだろ蛇島さん」

「うわあ！いきなり落ち着かないでください！」

「あと価値がないとか言わないの。ほら、さつきと座る！」

突然の奇行をする黒一点をなだめつつ、男子マネージャーの御厨は今の状況を見る。

試合という緊張と相手の挑発ともいえるパフォーマンスに殺気立っていたが誰かさんの奇行のおかげである程度冷静になったようだ。

入部してからそこまで経っていないはずなのにキャプテンとは種類の違う『精神的支柱』のような位置に彼がいるからこそ………突如壁に頭を打ち付ける人物が『精神的支柱』になっているのかという疑問は置いて良い方向に持っていけているのは間違いない。

それだけで場の空気を変えられるとは思えない。

今まで無名という割に目立つ活動もなく、いくら調べても野球に優れていたという話どころかスポーツに優れていたという事もない。それどころか中学生のころから一人暮らしという正気を疑う生活を送っていた。

男が一人でいると襲われかねないこのご時世に事件に巻き込まれたという話もなく奇跡的に貞操も守り切っている点から存在感がないのかと考えていた。

その割には気さくで他人に接することが多いため地味だったから無事という仮説は否定される。

さらに付け加えて御厨を避けている節があるためますます謎に包まれるこの男。それでも調べる時間はまだまだあるが……………

冷静になった逆巻はベンチで集まる選手らの端っこの行きみんなで気合を入れるふりをした。

「よし、悔つてはいけない相手だ完膚なきまで叩き潰すぞ！」

『『おおっー！』』

何故なら彼女たちから殺意が漏れていたからだ。流石にここまで露骨だとのマネージャーでさえ引いている。割と見慣れた光景？そんなことはない、抑圧されている彼女たちの本性は教室など公共の場で。

ハーレムの力か、黒一点を崇める者たちか。伝説の物語の始まりと旅路の終焉がここから始まるとはだれも知らない。

みたま高校対天空中央高校、開幕。

2-1、この数字は八回表が終わった時点での成績である。

お互いの投手の能力が良かったただけあって思うように打席が回らず僅かな点差しか開いていないのだ。

天空中央高校のエースである虹谷誠という投手は球速『125km』と高校球児でも上位に食い込む速度のストリートに加えてキレのある変化球で圧倒し、みたま高校のエースの青葉春人は魔球改と呼ばれる変化球で数々の打者を仕留めていった。

しかし、一つの要素が一点の差を広げた。そう、スタミナである。

ここまでほぼ一人で投げてきたために元々高くないスタミナがここに来て尽きてしまったのだ。その影響が出始めたのは六回表から、それまでヒットはあるも得点圏までにはもっていかせなかった彼女のコントロールが悪くなり始め、甘くなってしまう球を打たれて一点。そして七回表ですっぽ抜けたボールを撃ち込まれてしまい一点が入ってしまったのだ。

ランナーがいなかったことだけが幸いだった。序盤で一点を取っていたみたま高校も虹谷から決定的な一打を出せず、ずるずるとここまで引つ張ってしまったのだ。

「流石に限界ですか。青葉さん、引き際を誤ってしまい申し訳ないです」

「監督………いえ、俺が抑えきれなかったばかりに」

「いえ、貴女はよく頑張りました。あとは早川さんに任せましょう」

早川あおい、割と窮地での交代が確定した。ベンチから相手を観察しても全部は分からない。

「さっきの打席、俺が最後でよかった。早川、さっき俺が投げた感じだと………」

「打者の立ち位置でよく売ってきたのはインコースだったよ。あ、ごめんなさい私の打順回ってきそう」

「わかった、ぶちかましていい」

それでもマウンドで立っていた先輩がいる。彼女たちの情報から

最終回でどのように抑えていくかを考えていく。

時間はさほどない、それでもやらなければいけないのだ。たかが練習試合とはいえデビュー戦、いつかは立つことになるかと分かっていても緊張が伴ってしまう。

だからだろう。

カツキーン！

最終回で最悪の出だしとなってしまうのは。

肝心なところで連打を叩き込まれて得点追加、5―1と点差を広げられてしまった。

誰もここまであつさりと追い込まれてしまうとは思わなかっただろう。逆巻だって彼女がここまで炎上するなんて思いもしなかった。

ふと、逆巻は『やきゆうのままの』という単語が脳裏によぎった。何回もループしていると力を抜いていてもなんとなく勝てる試合も分かってくるのだ。全員が全員でないにしろ優秀なチームメイトがいるから信頼という意味での自信なのだ。

それでもふとした時に一気に炎上して気づけば大敗なんてことはまれにあった。

『ー』率いる恵比留高校も地区大会程度であつさり敗退してしまう事もあったので運が非常に悪いと起きる現象だろうと考えていた。

それが今、目の前で起きてとてもいたたまれない。何度も経験しているからわかるが大炎上したときのマウンドほど居づらい場所はない。

これ、終わった後に大泣きしないかどうか心配だ。逆巻の記憶の中では恋々高校で大敗を喫してしまった際には悔しさで……………という記憶があった。

このままでは終わらないと願ってはいたが、虚しくそのまま巻き返すことができずゲームセット。非常に残念ながら試合は終わってしまった。

こうもあつさりと終わってしまうのも、また野球。

今回は出場していないため下手な励ましはできないが、数多のループを繰り返した逆巻にはフォロワーの仕方が神がかっている。たとえば選択肢二つから三つに絞ることができるくらいには。この特技を得るのに犠牲になったループは数を知れない。

「お疲れ様です。はい、みんなのタオル」

マネージャーよりも率先してタオルを全員に渡しに来た俺にきよとんとした表情で見つめてくる。

「今日は負けた。大敗だ」

その言い方に試合に出ていた者たちはむっとした表示になる。無理もない、最終回で失点を重ねたあおいのせいと言いがかりをつけたところだが、流石にそれはできない。当の本人は顔を下に向けて表情は見えないが、落ち込んでいるのは間違いない。

試合にすら出ていないの奴に何がわかると文句を言いたかった。

「地区大会じゃあ間違いない当たるね。だから、次は勝てる。叩き潰せる。できるでしょ？」

なぜかいつもより軽い感じで彼は言った。練習試合とはいえ負けは負け、負けとはいえ練習試合なのだ。

次がある、という言葉は彼女たちには麻薬に等しかった。もしかしたら運が悪かっただけと勘違いしてしまう可能性は否めないが少しでも顔を上げてくれるのなら問題ない。

逆巻にとつてもここで落ち込まれて次に悪影響が出た場合、地区大会で早々に負けて経験点を稼げない可能性をつぶしておきたかったのだ。

「つしやあー帰ったら反省会だ！今日は消灯時間までとことんやるぞ！」

それに乗っかって青葉が暑苦しい副キャプテン（実際この世界では女性なのに暑苦しさが増している）が声を上げる。

地区大会だってあつという間に来てしまう。ここで小さいことを引きずってはいけない、立ち直らねばと葵も顔を上げる。その顔は少し目元が赤かったが涙はもう流れていなかった。

天空中央高校と練習試合を行った！

筋力ポイントが10上がった。

敏捷ポイントが10上がった。

変化ポイントが10上がった。

技術ポイントが10上がった。

精神ポイントが10上がった。

「むむむ、なんだか向こうのベンチに男子マネージャーがいないかい？」

「ふむ……………僕の見間違いじゃなければいるね」

「なんだ、この勝ったのに感じる敗北感は……………しかし、崩せたのはあの時だけか」

「何かが足りないんだ。モチベーションを上げる何かか！このままでは気を抜いたら負けてしまうかもしれない」

「らしくないな虹谷、とりあえず帰ったらナンパと反省会でもするか？」

「ナンパだけで時間が無くなりそうだけど、いいね」

天空中央高校の三馬鹿は今日も男あさりに励むのであった。